

J A B E E 信 通

(第82回)

日本女子大学家政学部住居学科

J A B E E 認定までの歩み(2)

日本女子大学家政学部住居学科 教授 J A B E E 対応責任者

石川 孝重

日本技術者教育認定機構

一・一 試行審査の受審を決定するまで

日本女子大学住居学科は、家政学部に所属する学科である。各学年九十名前後の学生が在籍し、修士課程と博士課程をもつ。専任教員は助手も含めて十四名で構成されている。

工学部のない本学では、当然のことながら、大学や学部全体での J A B E E に対する取り組みや認識もなく、その理解を得ることから始めなければならなかった。幸い、当初より現在まで、後藤祥子学長には終始、好意的な理解を示してもらい、実地審査などの折りにふれ、多大な協力とご支援をいただいた。さて、学科会議で J A B E E 認定に関する

話題が出たのは、二〇〇一年頃であった。先に述べた日本建築学会での動きを、話題の一つとして報告したのが最初であったように思う。当初は、工学部建築学科ではない本学住居学科で J A B E E 認定に取り組む必要があるのか否かさえ、教員の認識がまちまちであった。とはいえ、この頃に長らく教員会議の名称で実施してきた会議を、「教育改善会議」

に改称し、学科スタッフ全員で組織する、教育改善システムにおける学科内会議の一つとして明確に位置づけた。また、この会の議論から、学生による授業評価アンケートなどを、全学に先駆けて実施した。

この会議で、学会での J A B E E 認定に関する動きを報告するうち、住居学科でも、他大学との区別化の一つの方策として、J A B E E 認定に真剣に取り組むのも一案ではないかという気運が高まってきた。しかしながら、従来から住居学科では、住居・建築をハードな器としてだけとらえるのではなく、内に住まう人々のソフトな視点からとらえるのが、伝統的な特徴であった。そういった視点と、工学「技術者」教育のための認定制度との接点をはかるのは、行きつ戻りつ何度も議論を繰り返す必要があった。それは J A B E E 認定に端を発していても、学科本来の教育体制の在り方や、入試制度の見直し、果ては学科の行く末まで、議論を深めることとなった。一方私は、日本建築学会の委員会では、いわゆる工学部建築学科のみでなく、住居系学

科の立場から「建築学及び建築学関連分野」の一つとして、積極的に対象とするべきであると主張してきた。議論の末、建築学および建築学関連分野の分野別要件が成立し、二〇〇一年度には建築分野として初めての試行審査が実施されることになった。私自身、審査員研修を受ける一方、ある教育機関の試行審査に参加する機会を得た。この経験は、その後、本学住居学科が J A B E E 認定の本審査を受ける上で、きわめて貴重な機会になった。

このような学会関連での経験と学科内での議論を重ねつつ、学科の方針を決定しかねているところに、折しも、二〇〇二年度試行審査の受審校の一枚を、本学住居学科で引きつけてもらえないか、との打診が学会よりあった。実際問題、住居学科に J A B E E 認定は必要か？まさしく侃々諤々の議論の末、最終的に学科が出した結論は、まず、二〇〇二年度試行審査を受けてみよう。その結果によって、本審査受審の時期などを再検討しよう。学会からの要請に背中を押されるかたちで、学科でも決断を迫られることとなった。■